

## 現代の「荒す憎むべき者は」未だ現れていないという根拠

この主題は、ものみの塔1999年5月号で、ものみの塔自身がそう認めていることに基づいたものです。

マタイ24：15を最初に引用しておきましょう。

(翻訳によって、動詞の時制が異なるので、幾つかの訳を列挙しておきます。

■「したがって、あなたたちが、預言者ダニエルによって言われた荒らす忌むべきものが聖なる場所に立ったのを見る時」岩波翻訳委員会訳 1995

■「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを見たら」新共同訳 1987

■「預言者ダニエルのいう『荒廃のおそれ』が聖所に立つのをあなた方が見るとき」前田訳 1978

■「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、」新改訳 1970

■「それで、預言者ダニエルをもって言われた『(聖なる所を) 荒らす忌むべきものが聖なる所に』立つのを見たら」塚本訳 1963

■「それゆえ、荒廃をもたらす嫌悪すべきものが、預言者ダニエルを通して語られたとおり、聖なる場所に立っているのを見かけるなら」(マタイ 24:15) 新世界訳

「立つ」「見る」を比較すると、訳によって様々であることが分かります。

ギリ語： ἵδητε イデーテ 見た (アオリスト [過去形])

ギリ語： ἕστως エストス 立った (完了形)

原語の単語の時制を忠実に訳すところになります。

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に (すでに) 立ったのを見たならば」

ここで、新世界訳だけ、特に異なっていて、「見かける」と訳しています。

この語は、単に「見る」という語であり、同じ新世界訳の、この同じ語は、単に「見る」と訳されています (新世界訳のルカ 21:20 ではこの同一の単語は「見た」になっています) が、マタイとマルコのこの記述に限って「見かける」となっています。何かしらの意図が働かない限り、この単純な語を訳し分ける理由はないでしょう。

「見る」と「見かける」は明らかにニュアンスは異なります。

意識してその物体を確認する行為を【見る】と、言います。

「見かける」は「目にする」「目にとまる」と似たニュアンスで、偶然、たまたま、或いは無意識に見たものを覚えていた時の表現を【見かける】と、言います。

どうしてここを、わざわざこのように訳し分けたのかその真意は分かりませんが、「見たなら」と言われれば「見たかな」と考えますが、「見かけるなら」と言われれば、さして、はつきりと見たかを考えることもなく、見たような気がする、見たかも知れない、程度の思考で済ませる効果はあるかも知れません。

では、どのように、現代の「荒廃をもたらす嫌悪すべき者」の実体を見極めることができるでしょうか。

あれが、そうですと言える根拠は唯一、「聖なる所に」立った時です。

神から「嫌悪の情」を持って見られる、そのように見なされるのは、「聖なる所に」置かれた時です。分かり易いように「ひとつのたとえ」で考えてみましょう。

例えば、「生ゴミ」です。

例えば、キャベツの芯は調理の最中には「生ゴミ」とは考えません。食べた直後の食卓の皿の上にある魚の頭も「生ゴミ」とは言いません。

しかし、それをひと度「ゴミ箱」に投げ込んだ時から、それらは生ゴミになります。

普通「生ゴミ入れ」は大抵キッチンの所定の場所に置いてあるでしょう。或いはそれを捨てるためにゴミ袋の中に入れます。それは間違いなく「生ゴミ」ですが、しかしそこに、そうして置いてある以上何も問題ありません。そして、それはどこの家庭にもある、ありふれたものです。

では、隣の家の人自分家の「生ゴミ」をあなたの家の門を開けて、玄関の前に置いたらどうなるでしょうか。「玄関」は、普段はさほど神聖な場所とは見なされていないにしても、大問題でしょう。それが、動物の死骸だったらどうでしょうか。ずかずかと上がり込んで「床の間」の上に置いたらどうでしょうか。間違い無く警察沙汰になることでしょう。

あなたがその人に「これは何ですか。どういうつもりですか」と苦情を言った時、「生ゴミですけどそれが何か？」と答えようものなら、裁判沙汰になるのは必至でしょう。

それ以来、そのありふれたゴミは、あなたにとって争いをもたらす嫌悪すべきものと見なされることでしょう。

なぜなら、あつてはならないところに置かれたからです。

つまり、偶像であれなんであれ、本来あるべきところにある間は、唯のありふれたものです。

しかし、ひとたびそれが「聖なる」所に置かれた時点で、許されざるものになります。

つまり、その物体そのものが問題なのではなく、その「行為」が問題なのです。

ワザと、敢えてそのようにした行為の故に、神に関わる神聖さを「汚そうとした」故にそれ以来、それは「嫌悪すべきもの」とみなされ、その時以来存在することになります。

さて、西暦一世紀当時の事を考えて見ましょう。

イエスのこの預言のことばについて、ルカは、まったく別の表現で、はっきりとこう記しています。

「エルサレムが野営を張った軍隊に囲まれるのを見たなら…」(ルカ 21:20)

まず「軍隊」そのものは、昔からあり、ユダヤにもありました。ダビデは勇敢な戦士でした。

神は「万軍の主」と呼ばれています。当時「軍隊」そのものが否定的に見られることはありませんでした。では、ローマ軍、もしくは外国の軍隊はどうでしょうか。軍隊は確かに「荒廃をもたらす」者ですが、ではそれゆえにダニエル書で言及されている「荒廃をもたらす」ものとなるでしょうか。そうであれば、それは、歴史上いつでも存在することになります。

また、イエスが、この言葉を弟子たちに語られた時、弟子たちは、当時の政治情勢から言って、「荒廃をもたらす嫌悪すべき者」とはローマ軍の事であろうと予測したに違いありません。ルカの具体的な描写と併せて考えるとき、それ以外の予想を立てる方が無理でしょう。

では、十分に予測しうるからといって、また実際にその通りだったからといって、「荒廃をもたらす嫌悪すべき者」はローマ帝国が立った時から存在すると言えるでしょうか。

いいえ、ダニエル書も福音書も、その表現は、特定のタイミングで、ある特定の行動を取る者についての表現です。

では、遑って、マカベヤの時代のエピファネスが置いたとされる者についてはどうでしょうか。記録によると彼は、エルサレムの神殿に「ゼウスの像」を設置したとされています。それで、この時は文字通りの「偶像」でした。しかし、「宗教的偶像」もまた、軍隊と同じで歴史上いつの時代にも、世界のどこにでも存在します。

以上の事から、「荒廃をもたらす嫌悪すべき者」は、「たぶん、アイツに違いない」と睨んだとしても、「かなり怪しい」とどれほど予測できたとしても、実際に「聖なる所に立つ」までは、それを実際に「見る」までは、そのように表現される実体としては、どこにも存在しないと言わねばなりません。何故なら、そこに立たない限り、「忌むべき」「嫌悪すべき」理由そのものが存在しないからです。

では、現代の「荒廃をもたらす嫌悪すべき者」の正体は誰、あるいは何でしょうか。ものみの塔によれば、それは「国連」だということになっています。

「ものみの塔」誌（英語）は、1929年12月15日号、374ページで、こう言明しました。「国際連盟はそもそもその意図からして、人々を神とキリストから遠ざけるものであり、それゆえに荒廃をもたらすもの、サタンが生み出したもの、神から見て忌むべきものである」。ですから、「嫌悪すべきもの」は1919年に現われたのです。やがて、国際連合が国際連盟に取って代わりました。エホバの証人は長年、これら人間の平和機構が神から見て嫌悪すべきものであることを暴露してきました。」—塔 99 5/1 15 ページ 8 節

もし、「サタンが生み出したもので、神から見て忌むべき者で、人を神とキリストから遠ざける」という理由でその者が「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」であるなら、そうしたものは大昔から、世界中の至る所に存在することになり、そこら中「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」だらけになってしまうでしょう。それは「国連」に限ったことではありません。

しかし、ともかくそれは「国連」だということになっています。

では国連はいつ、聖なる所、立つてはならないところに立ったのでしょうか。このものみの塔の記事の少し後にはこう説明されています。

「嫌悪すべきもの」が存在するようになって久しいとしても、それが『聖なる場所に立つ』ことと大患難との関連に注目すれば、わたしたちの考え方は変わってくるはずです。どのようにでしょうか。神の民はかつて、大患難の第一局面は1914年に始まり、その最終部分はハルマゲドンの戦いになると理解していました。

したがって、後代における「嫌悪すべきもの」が第一次世界大戦のすぐ後に聖なる場所に立ったに違いないと、かつて考えられていたわけも理解できます。

しかし後年に、わたしたちは異なった見方をするようになりました。1969年7月10日…「地に平和」国際大会で、ものみの塔聖書冊子協会の当時の副会長 F・W・フランズは、強い興奮を誘う話をしました。…「以前の説明によれば、『大患難』は西暦1914年に始まり、当時それは最後まで進行するままにはされず、神は1918年11月に第一次世界大戦が終わるようになされました。神はそれ以来、選ばれたクリスチャンから成る、ご自分の油そそがれた残りの者が活動するための期間を猶予しておられ、このあと『大患難』の最終部分がハルマゲドンの戦いで再び始まるのを許されるということでした」。

次いで、大きく調整されたこの説明がなされました。「1世紀の出来事に照らしてみると、……対型

的な『大患難』は西暦 1914 年に始まったのではないことが分かります。むしろ、1914 年から 1918 年にかけて、現代の対型的なエルサレムに生じた事柄は、『苦しみの劇痛の始まり』にすぎませんでした。……二度と起きないような『大患難』はまだ先のことです。それは、偽りの宗教の世界帝国（キリスト教世界を含む）の滅びを意味しているからです。それに続いて、ハルマゲドンにおける『全能者なる神の大いなる日の戦争』が起きるのです。要するに、大患難は始めから終わりまで、まだ先のことだったのです。」—塔 99 5/1 15 ページ 10—12 節

この記事で明らかにしているように、つまり 1969 年の夏の大会まで、二度と起きない未曾有の「大患難」は 1914 年に始まったと言うのが「真理」でした。

そして、世界戦争以降は、「大患難」は中休みというか中だるみと言うか、ともかくそういう状態で 1914 年以来ずっと続けているという受け止め方でした。

例えば 1889 に発行されたチャールズ・T・ラッセル著「聖書研究第二巻一 The Time Is at Hand (時は近づいた)」99,101 ページで、「ハルマゲドンはすでに始まっている。」「この「異邦人の時」に関する聖書の強力な証拠から判断して、この世の諸王国の最終的な終わりと神の王国の完全な設立は、1915 年の終わりまでに(終わり近くに)達成されることは確かな真理と考えられる。」と述べていました。この「1914 年大患難開始説」が変更されたのは、これが書かれた時から丁度 80 年後の事でした。

しかし、いくら何でも、中休みが長すぎ、ごまかしきれなくなった 1969 年に、爆弾発言がありました。「大患難は始めから終わりまで、まだ先のこと」で、実は何も起きてはいなかった事をようやく認める発表を行ったということです。

80 年も経った後で、実は、何も始まってはいませんでした。と事も無げに平然と言っただけの態度はさすがというか、まるで、「…で、そういうことです。それが何か？」と言わんばかりの態度にこの組織のスゴさを感じます。

しかし、「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」は「国連」として 1919 年に、聖なる所に立ち、「エホバの証人は長年、これら人間の平和機構が神から見ると嫌悪すべきものであることを暴露してきた」ということです。

しかし、それから丁度 30 年後の 1999 年に、ここに引用している爆弾発言がありました。

「大患難の始まりがなお将来のことであれば、『聖なる場所に立つ』のも、まだ先のことでしょうか。そうみなしてよいでしょう。「嫌悪すべきもの」は今世紀初頭に現われて、これまで何十年も存続してきましたが、近い将来、特異なかたちで「聖なる場所に」立つことでしょう。」—塔 99 5/1 15 ページ 16 節

そしてこの後三ヶ月後に、改めてこのことの念押しをしています。

\*\*\* 塔 99 8/15 29 ページ 覚えていますか \*\*\*

□「嫌悪すべきもの」が『聖なる場所に立つ』のは将来のことである、とするのが当を得ているのはなぜですか。□

「古代の型の場合、『嫌悪すべきものが聖なる場所に立つ』ことは、西暦 66 年の、ガルス將軍の率いるローマ人による攻撃と関連していました。その攻撃の現代版—「大患難」の勃発—は、なお前途に控えています。(マタイ 24:21) ですから、「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」が聖なる場所に

立つのは、これからのことです。—5月1日号, 16, 17 ページ。]

ところで、それがまだ、「聖なる所」に立っていないのであれば、いったい何を根拠に「国連」が「荒廃をもたらす者」だという主張ができるのでしょうか。

すでに述べてきたように、実際に立つてはならないと言える場所に立ったのを見るまでは、何をも、「荒廃をもたらす者」だと決めつける根拠を持ちません。

「エホバの証人は長年、これら人間の平和機構が神から見て嫌悪すべきものであることを」、「暴露」してきたのではなく、単なる思い込みによる謂われのない非難を永年に渡って浴びせ続けてきたということです。

これは、言ってみれば、こう述べているのと同じです。

まだ、何も盗んでおらず、誰をも傷つけてはいませんが、あなたが「強盗犯人」です。

ともかく、誰が何と言おうとあなたが「強盗」なのは間違いありません。ただ、まだ何の犯罪も犯してないので、「近い将来、特異なかたちで「金庫の前に」立つことでしょう」と叫び続ける、狂気に満ちた妄想を誰が取り上げるのでしょうか。

ところで、「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」が「聖なる所」に立っているのを実際に見たら、それは行動の合図です。つまり「山に逃げ始めるべき」時となります。

イエスが語られた「終わりのしるし」とその警告の言葉には、いつどの段階で何をすべきか、すべきでないかが明確に記されています。

先ず第一段階。

「イエスはお答えになった。人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがメシアだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞くだろうが、慌てないように気をつけなさい。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。…これらはすべて産みの苦しみの始まりである。」(マタイ 24:4-8)

「わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。」(ルカ 21:8)

この第一段階では、「慌てないように、誰かについていったりしないように」という警告です。

戦争や、地震、時が近づいたという声などがあっても、それは「始まりに過ぎない」ので、行動を起こす必要がないどころか、何の行動もとってはならない。「慌てないようにしなさい」というのは取り敢えず動くな、行動を起こすなということです。パニックに陥って、右往左往したり、真に受けて誰かについて行ったりしないようにということです。

ともかく落ち着いて、静観すべき、物事を見守るべき時です。そして、次の段階を見過ごさないように心の準備をすべき時です。

第二段階。

「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを見たら——読者は悟れ——、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。屋上にいる者は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはならない。畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。」(マタイ 24:15-18)

この度は、逆にぐずぐずしているべき時ではありません。

果敢な行動が必要な時です。

それで、今日、戦争や地震、偽預言者による、「終わりが近い」という声が上がっており、それが、イエスの語られた「しるし」の成就だと認められたとしても、その後のこと、つまり「憎むべき破壊者」は「聖なる所」に立ってはいません。つまり未だ歴史の舞台に登場すらしてきてはいません。ですから慌てず落ち着いて、通常の生活をしながら、成り行きを見守るべき時です。

ところで、イエスは「終わりのしるし」について語り始めるその開口一番いきなり、「惑わされないように気をつけなさい」から始まっています。

一番先に注意を向けるべき事は、戦争でもなければ、食糧不足でもない、「惑わされる」危険性です。どんな種類の危険かという、それはつまり、預言的な性質のもの、聖書預言に関わる惑わしの危険です。

ところで、この、大規模な戦争の前に現れる「偽預言」について述べるマタイ24：5を「ものみの塔ライフラインCD」で検索すると、「洞察」と「ものみの塔75年と70年」そして「千年王国」の、全部でたったの4箇所数行のコメントがあるのみで、しかも全て西暦一世紀当時の話して、現代の「偽預言者」についての記事は皆無です。ほとんど完全に無視しているという状況です。よほどこの聖句に触れたくないようです。

パウロやペテロ、そしてヨハネも預言をしています、自らを「預言者」と名乗ったこともなければ自認もしていません。

新約聖書が書き終わられた時点で、将来に預言者が現れることは何も示されておらず、それを暗示する箇所さえありません。最後の預言者は「イエス・キリスト」であるというのが、共通の認識でしょう。

キリストが再び来られるときは、預言をするためではなく、「千年間、治める」という事を別にすれば、選ばれた者を集めるということと、裁きを行うという2つの目的以外ありません。

「終わりの時」に「福音が全地で伝えられる」ことや「二人の証人」などの表現はありますが、「預言者」や「預言」が行われるという記述はありません。

従って、西暦一世紀以降（使徒ヨハネ以降）、とりわけ終末の時代、或いはその前後、その期間中に出て来る「終わりが近い」などの「預言」をする者は例外なくすべて「偽預言者」であると聖書は述べています。

さて、偶然かも知れませんが、こうして見て行くと、ものみの塔は、末尾が9の年に「爆弾発言」が多いようです。

それで、もしかすると、1914年以来、サタンとイエスは同時に活動を開始し、常に一緒に行動してきたという、1914年臨在説もさすがにごまかしきれなくなつて、2019年辺りに「終わりの日」は「**始めから終わりまで、まだ先のこと**」で、実は何も起きてはいなかった事をようやく認める発表を行うということになるかもしれません。

もっともそれまでに、「本当の」終わりの時が始まらなければの話ですが。

※ 関連記事「77 時限付き爆弾発言－マタイ2430との矛盾点」もご覧下さい。